



岡崎市美博ニュース  
【アルカディア】

codio

O K A Z A K I  
C I T Y M U S E U M S | VOL.42  
N E W S



〈半身達磨図〉白隠筆 幡豆郡吉良町・華藏寺

エッセイ

画文交響の日本

ミュージアム講座募集 後期講座

三河の禅林 — 臨濟禅と武家の心

学芸員実習関連報告

イベント報告 おかざきの考古学



岡崎市美術博物館

## 画文交響の日本

館長 芳賀 徹

先日、NHKの「日曜美術館」を見てもなく見ていたら、夏目漱石の自作の水彩絵はがきや晩年の南画作品がつつぎに画面に出てきた。私は、おや、とばかりにソファから身を起こした。

そうなのだ。文人夏目漱石は絵を抜きにしては語れない作家なのだ。漱石は五十年の生涯を通じて絵が好きで、絵どころもゆたかな人だったのだ。NHKもようやくそのことに気がついたか。などと思っているうちに、画面は童画のいわさきちひろと一茶の俳句の組み合わせに移り、出演者のお遊びに変わってしまった。私はまたソファにのびてしまった。

漱石は少年のころから絵を見るのが好きだった。十歳で、養子先から早稲田の実家に帰ってきたころのことらしいが、彼は床の間の掛け軸や、ふすまの絵や、虫干しで倉から出された屏風や軸物の絵などを前にして、「黙然として」うづまり、絵のなかに入りこむような感じで見つづけているのが好きだったという。後年の『思ひ出す事など』というエッセイ集のなかで、その少年の日の恍惚を回想している。

ことに、山を背にし、暖かい日差しに梅を眞白に咲かせ、垣根の外には小川が音たてて流れているような家を描いた南画の山水がお気に入り、いつかはこういうところに住みたいと願っていた、とも書いている。実家の夏目家にもどってみても、家族がよそよそしく、いつまでもなじめなかった孤独感、自分の行く末への不安——その金之助少年の心をなぐさめ、いやしてくれたのが、絵だったのである。

漱石がまた絵に夢中になり、本格的に美術を研究するようになるのは、三十代半ばで二年余のロンドン留学をしたときだった（明治33—36）。ロンドンでも彼は孤独だった。イギリス人の友人とてなく、わずかな給費で書物ばかり買っては、英文学研究に沈潜した。「夏目狂せり」との噂が立つほどのその神経衰弱的状况から彼を救ってくれたのが、観劇と美術館訪問だった。

漱石はロンドン市内や近郊の美術館、博物館を実によく訪ねた。モナリザも、ティチアーノも、ポッティチェルリも、クロード・ロランもターナーも見た。『オフィーリア』の J・E・ミレーや、ロッセティやバーン＝ジョーンズ、ホルマン、ハントなどのラファエル前派の画家たちはもちろん、オックスフォード大学図

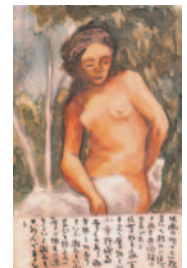


オックスフォード大学図

絵所を栗焼く人に尋ねけり  
との一句は、ロンドン南郊にダリッチ美術館を訪ねたときの作である（この古い公立美術館のコレクションからバロック絵画を中心に借りて、十年前、本館で展覧会を開いたこともあった）。

これらの美術見聞が、漱石帰国後に始まる作家活動に大いに生かされ、その糧となってゆくことはいうまでもない。ミレーやターナーが長沢蘆雪や伊藤若沖と一緒にあって、自由自在の東西比較美術論が展開される画工小説『草枕』のような作品は、20世紀初めの世界の他のどこにもなかった。『虞美人草』にも『三四郎』『それから』『門』などにも、東西の美術作品や画家はしょっちゅう登場してきて、小説展開の小道具となり大道具ともなる。『三四郎』などは「絵画小説」とさえ呼んでもいいだろう。

『吾輩は猫である』や短編集『漾虚集』などから始まって、漱石の本は作者自身の指図で画家中村不折や画学生橋口五葉、後には津田青楓によって装釘され、挿絵を施されて、本そのものがアール・ヌーヴォーの画廊ようになった。漱石が水彩ではがきに裸婦や風景や自画像を描き、下手だけれどそれを自慢して寺田寅彦や橋口貢らに送り、それが百枚をもこえるようになるのは、この作家活動と並行していた。

寺田寅彦宛  
明治37年10月25日

そして晩年は、『心』『明暗』の時期に至るまで、津田青楓を先生にし、その先生に年中ケチをつけられながらも、南画風の淡彩山水画を描きつづけて倦むことがなかった。—私は二十五年前、漱石の文業に対するこれらの画事の重要性、その両者の間の親近性を指摘して、漱石における「絵画の領分」を主張し、それを自著の題名としたこともあったのである。

これを画文交響という美しい言葉でも呼んでみたいが、考えてみれば画文交響とは源氏物語絵巻や歌枕の絵屏風などの大和絵以来、日本文化史のもっとも本質的な伝統の一つでもあったのではなからうか。中世の禅僧たちの画賛つきの詩画軸、芭蕉や蕪村の俳画、そして岸田劉生や中川一政や小出楯重、鏑木清方、村山槐多にいたる、詩文にも巧みであった画人たち、正岡子規や、永井荷風や、川端康成や斎藤茂吉や西脇順三郎など、絵が好きで絵どころもあった詩文の人たち——戦前・戦後の昭和までなおゆたかにつづいていたこの画文交響の伝統を、ぜひこの21世紀の日本にもよみがえらせたいものだ。そしていつか「画文交響の日本」という壮麗な展覧会を、この岡崎で開いてみたいものではないか。



山下隠栖図

## 「やさしいミュージアム講座」受講者募集

市民の方々に歴史や美術をより身近に感じていただけるよう、11月～平成22年3月の毎月1度の連続講座「やさしいミュージアム講座（後期）」を開催します。当館館長と学芸員が各テーマに沿ってわかりやすくお話しします

## 日本の近代美術

- \* 期間／平成21年11月～平成22年3月の毎月1回
- \* 時間／14:00～15:30
- \* 講師／芳賀徹（館長）
- \* 内容／明治から戦後にいたる日本の近代美術を5回のテーマに分けて説明します。
- 【第1回】 11月25日(水)「明治の前衛 高橋由一」
- 【第2回】 12月15日(火)「黒田清輝とフランス」
- 【第3回】 1月13日(水)「夏日漱石と絵画」
- 【第4回】 2月17日(水)「小出楯重と大阪モダニズム」
- 【第5回】 3月17日(水)「戦後美術—日本と世界」



## 矢作川流域の歴史

- \* 期間／平成21年11月～平成22年3月の毎月1回
- \* 時間／10:30～12:00
- \* 講師／荒井信貴（副館長）、堀江登志実（副館長代行）
- \* 内容／矢作川流域の史料を読むことにより、矢作川流域の歴史を説明します。
- 【第1回】 11月 4日(水)「地形・地質図を読む」
- 【第2回】 12月 9日(水)「遺跡分布図を読む」
- 【第3回】 1月14日(木)「舟運の史料を読む」
- 【第4回】 2月10日(水)「洪水の史料を読む」
- 【第5回】 3月10日(水)「渡船・橋の史料を読む」



## 共通

- \* 定員／50名 \* 参加費／無料 \* 会場／当館1階セミナールーム
- \* 申込方法／往復ハガキまたは ホームページ・あいち簡易電子受付サービスから10月20日（必着）までにお申し込みください。  
電話による申し込みは受け付けませんのでご注意ください。
- ※各講座5回全て参加できる方のみご応募ください。
- ※応募多数の場合は抽選を行いますので、あらかじめご了承ください。

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/event/01.html>

## 往復ハガキ

ハガキ1枚につき  
1講座の申し込み。  
一人一葉。

## ▼往信表面

50 往信	44440002	岡崎市高隆寺町1 岡崎中央総合公園内
岡崎市美術館	「やさしいミュージアム講座」係	(空白) ※当館からの連絡用

## ▼返信表面

50 返信	□□□□□□	市・郡 区・町
様	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 希望講座名 「矢作川流域の歴史」 または 「日本の近代美術」</li> <li>● 郵便番号</li> <li>● 住所</li> <li>● 氏名</li> <li>● 年齢</li> <li>● 電話番号</li> </ul>



## 三河の禅林 — 臨濟禪と武家の心

学芸員 浦野 加穂子

当館では、これまで日本人の心の拠り所である信仰について、法相宗、天台宗、浄土宗、浄土真宗などを中心とした展覧会を開催してきました。今回は禅宗、なかでも臨濟宗に焦点を当てた企画展「三河の禅林—臨濟禪と武家の心—」を開催します。

## 序章 臨濟禪と武家

禅宗では、自らの内にある仏性を知り、悟りにいたる最も大切な修行として坐禅を行います。禅宗は、6世紀頃に中国に渡ったインド僧達磨を始祖として、いくつかの宗に分かれながら中国で隆盛を極めました。禅は日本には白鳳時代に伝来し、平安時代には天台教学の1つにも取り入れられていますが、禅宗として本格的に伝えられたのは鎌倉時代のことです。栄西や道元をはじめとする中国で禅を学んだ僧侶や来日した蘭溪道隆などの中国僧たちが日本の禅宗の発展に大きな役割を果たし、臨濟宗、曹洞宗、江戸時代に黄檗宗が興りました。



重文《無為昭元像》鎌倉時代  
豊田市・長興寺蔵

臨濟宗では言葉や經典に依らず、師家から出された公案（悟りを開くために課題として示される祖師の言葉や事跡）に坐禅や作務を通じて取り組み、禅問答を繰り返すなど、師との厳しい精神的な修練を通して悟りを開きます。そして師は法を正しく継承した弟子にその証として、自らの袈裟や墨蹟、頂相（肖像画に賛を書いたもの）を与えました。頂相は単にリアルに顔かたちを写すだけではなく、師の高い精神性をも表現した迫真の肖像であることが必要とされました。長興寺開山太陽義冲の師で、臨濟宗東光門派の祖、無為昭元の自賛の頂相は、鎌倉時代に遡る高僧の厳かな面影を今に伝えています。また禅僧が書いた、偈頌（詩文）、法語、尺牘（書状）、遺偈（遺言）などの墨蹟は、高僧の教えや人間性を示すものとして重要視されています。

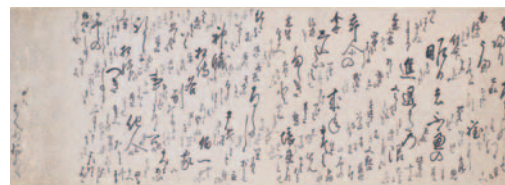
禅宗は、北条氏、足利氏をはじめとする武家政権の篤い支持を得て、なかでも臨濟宗は鎌倉・京都を中心に発展し、全国へと広がっていきました。厳しい修行を通して自らと向き合い悟りを開く禅は、戦いに身を投じ、自らの力で道を切り開いていく武將たちを引き付け、その精神的な支柱となるとともに、朝廷貴族の伝統的な文化に対する武士独自の新たな文化として禅を積極的に受け入れたと考えられます。

## 第1章 三河武士と禅 — 清流間断なし—

本章では、三河の臨濟宗の名刹とゆかりの禅僧たちの頂相や墨蹟などを展示し、その事跡を紹介するとともに、彼らに帰依し、庇護した三河の有力武將たちとの関わりを示す資料を紹介します。

三河においては、足利一族などの進出にともない、実相寺、長興寺、天恩寺などの臨濟宗寺院が次々と建立され、さらに禅の広がりとともに旧来の寺院が臨濟宗に改宗していきました。

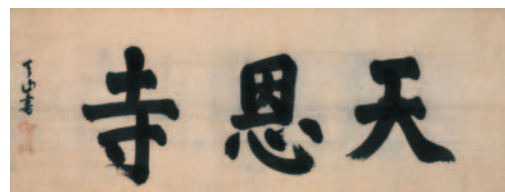
実相寺（西尾市）は、西条城主吉良満氏が京都東福寺開山の円爾弁円を開山として創建し、三河の安国寺として栄えました。東条吉良氏の菩提寺である花岳寺（吉良町）は、吉良尊義が実相寺4世一峰明一を開山として真言宗より臨濟宗に転じました。長興寺（豊田市）は、尾張国守護、室町幕府の奉公衆などを務めた中条氏が創建し、当地の東福寺派の拠点となりました。東観音寺（豊橋市）は、古来漁民や牛馬に携わる人々から信仰を集め、真言宗から鎌倉建長寺下の臨濟宗に転じ、田原城主戸田氏らの庇護を受けました。これらの寺院には、地域の有力武士から数多くの宝物が奉納されています。「後柏原天皇宸翰御消息」は、朝廷関係の儀礼を掌管する高官職を務めた吉良義冬が花岳寺に寄進したと伝えられ、希少な宸翰（天皇自筆の文書）であり、中世神祇史上に重要な内容であることなどから国の重要文化財に指定されています。



重文《後柏原天皇宸翰御消息 はく少将宛》  
室町時代 吉良町・花岳寺蔵

しかしこれらの寺院の盛衰は、三河における武家勢力の消長に大きく影響されました。室町時代後期の今川氏の三河への急速な勢力伸張は、寺勢のみならず宗派にも影響を与え、駿河臨濟寺開祖で今川家の重臣である太原崇孚により、三河の東福寺派、建長寺派などの寺院の多くが妙心寺派へ転ずることになりました。

また永源寺派から妙心寺派に転じた寺院としては、三河臨濟宗の中心寺院の一つである天恩寺（岡崎市）があります。寺伝では貞治元年（1362）（又は応安2年/1369）室町幕府3代将軍足利義満が初代尊氏の遺言により、永源寺（滋賀県）2世弥天永釈に命じて開創し、師である寂室元光を勧請



重文《足利義満書蹟額字「天恩寺」》  
室町時代 滋賀県・永源寺蔵

開山として創建したとされています。足利氏の帰依が篤く、永徳2年（1382）義満に近侍する源信氏から片寄郷など4カ所の寄進をうけ、義満自筆の山号・寺号が下されています。以後も作手城主奥平氏、吉田城主池田輝政、徳川家康らの保護を受け、輝政は海国寺（名古屋市）より仁峯永善を招き、妙心寺派寺院として再興させました。

天恩寺では、今年4月の岡崎市史額田資料編作成の調査の際に、本尊地藏菩薩坐像の頭部内より、舍利・爪・体毛・経典・古文書などが収められた経筒が発見され、新聞等で話題となりました。この中には当寺の実質上の開祖である弥天永釈が康暦元年（1379）に記した願文や体毛、至徳元年（1384）等の年記や、舎利の寄進者の名を列記した経典などがあり、これは南北朝時代に遡る胎内納入品の貴重な事例であり、また当時の信仰形態を考える上で重要な資料として注目されています。



地藏菩薩像胎内納入品 南北朝時代 岡崎市・天恩寺蔵

## 第2章 三河の禅文化 一銀椀裏に雪を盛る一

ここでは、三河の臨済宗寺院が育んだ奥深い禅文化の名品をご紹介します。

禅宗においては、釈迦の悟りの体験を重視するため、従来仏像を必要としないところに特徴があるとされていました。しかし実際の禅刹には、本尊として宝冠釈迦如来像や地藏菩薩像などがまつられ、他にも伽藍神、羅漢、韋駄天など禅宗独特の仏像が安置されており、涅槃図や羅漢図など様々な仏画が伝えられています。これらの図像や技法には中国の影響が強



県文  
《宝冠釈迦如来坐像》  
南北朝時代  
貞和2年(1346)  
西尾市・願成寺蔵

く認められ、また青磁や堆朱など中国伝来の仏具類が禅宗寺院を彩りました。

中国と日本との間を往来した禅僧たちは、禅とともに水墨画や茶礼など異国情緒あふれる様々な文化をもたらしました。禅宗寺院は新たな文化の拠点となり、禅僧は宗教者であるとともに、大陸の文化・文芸に精通した教養人としても活躍しました。水墨画は、平安末期に中国の最新の絵画様式として取り入れられ、達磨などの祖師像や道釈画（道教や仏教



県文《三十三観音像のうち中尊観音像》  
室町時代 豊田市・長興寺蔵

関連の人物画) など、禅の思想を表す様々な画題の他、山水画や老荘思想を背景とする詩画軸（絵の余白に複数の禅僧が賛を寄せたもの）などが描かれました。室町時代には詩文を重んじる五山文学が盛んになり、夢窓疎石や虎関師錬などの禅僧が活躍し、夢窓を開山とする相国寺は如拙、雪舟など優れた画僧を輩出しました。江戸時代に入ると、臨済宗中興の祖白隠慧鶴（1685～1768）などが、禅の教えをわかりやすい言葉や比喩を用いて表した数多くの禅画を描きました。本号表紙の「半身達磨図」白隠筆（華蔵寺蔵）など三河の臨済宗寺院にもこれら禅文化の名品の数々が伝えられています。また禅刹の幅広い交流を通じて、華蔵寺には日本南画の大成者、池大雅の墨蹟や水墨画、天恩寺には尾張藩御用絵師を務めた近世南画の巨匠、山本梅逸がまだ春園と号していた時代の希少な襖絵などが奉納されています。

喧騒の日々を離れて、山紫水明の地に建つ当館にて、禅を通して、自らの心を静かに見つめ直してはみてはいかがでしょうか。



《百花競妍 三・四》山本梅逸筆 江戸時代 岡崎市・天恩寺蔵



# 平成21年度 博物館実習報告

学芸員 浦野 加穂子

当館では8月18日から22日まで、今年度の博物館実習を実施しました。これは博物館活動の一環として、学芸員資格の習得を希望する方に対して、実際に博物館の現場で学芸員をはじめ館職員の仕事を体験し、それを通じて博物館に携わる人材の育成と博物館活動の普及を目的とするもので、毎年8月に行っています。

今年は、例年より少ない6名の大学生が参加しました。実習生は館の施設管理や運営、考古・絵画・掛軸・茶器等の資料の取り扱い、図書整理や広報活動、子どもと博物館、作品の収集とその活用、博物館の抱える課題などについて学びました。最終日には実習生による自由討論が行われ、理想の博物館像、新たな来館者を開拓する工夫、博物館と教育活動などをテーマに、同席した学芸員を交えて活発な意見交換が行われました。最後に、博物館実習応募票と同じ「私の学芸員像」の課題レポートと、この5日間の実習の感想文を提出してもらいました。そこからはこの実習を通じて学生の皆さんの学芸員に対する意識が大きく変化したことがわかりました。



## 美術博物館は大切なもの

愛知学泉大学4年 中山大介さん

学芸員実習を経験してみて、改めて美術博物館の存在が重要なものだ、と再認識しました。この不景気の中で、文化的なものは予算を削る対象になりやすいものです。しかし、文化的なものが町から消えていくのは、大変寂しいことだと思います。実際、収蔵庫等を拝見させて頂いたり、学芸員さん達の熱のこもった話を聞くと、美術博物館は市にとって必要であり、医療、教育、福祉、同様に人にとって大切なもののひとつだと思います。



## 美術博物館の想いを知る

金城学院大学4年 鈴村尚子さん

私はこの学芸員実習で、様々な「リアル」を体験することができました。作品を間近で感じられる実習であったり、美術博物館に対する学芸員の方の想いであったり、貴重なお話をたくさん聞く事ができ、毎日が発見だらけでした。中でも、学芸員の方のお話は、専門的な話だけでなく、美術博物館の現状や今後の課題など、今どうすべきなのかという現実も知ることができました。一緒に実習を行ってきた皆の意見も聞く事で、私はさらに視野が広がりました。様々な思いを持った生の声と共に、とても中身の濃い実習ができました。



## 学芸員実習を終えて

愛知県立大学4年 杉山晴香さん

学芸員実習を通じて、私の持っていた学芸員のイメージはガラッと変わりました。特に印象的だったのは、講義の中で学芸員の方が「人と人のつながり」について何度も話されていたことです。作品との出会い、展示には学芸員の強い信念がこめられていることを学びました。作品や来館者のためにされている工夫についてもしっかりと学んだので、たくさんの人に伝えていきたいと思っています。貴重な体験をすることができ、とても充実した5日間となりました。



## 美術館・博物館を支える人

名古屋芸術大学4年 河合美奈さん

私がこの実習を受けたのは、美術と社会を繋ぐ仕事がしたいと思っていて、その1つに学芸員があったからです。しかし、施設管理の仕事を見たり、小学校へ配布するチラシの梱包作業などを体験させて頂き、学芸員以外の方々の地道な作業も、館を支え、集客に繋がって行く事を学びました。学芸員は狭き門なのでなれるか分かりませんが、諦めず勉強していきたいと思ったり、どんな形でもいいので、美術館を支える一員として活動していきたいと、改めて感じる事が出来ました。



## 美術、博物館における教育活動の重要性

愛知大学4年 近藤由惟さん

岡崎市に住む小学生の多くは、授業の一環として市内の美術館ないし博物館へ行った経験があります。私もその内の1人で、岡崎市美術博物館での実習を希望したのもその為です。実習生の内4名が岡崎市出身ですが、やはり美術博物館での思い出が話題に上がりました。育ってきた環境や学校が違う私たちに同じ感動を与え、さらにはその感動が大学生になった今でもそれぞれの心に残っているということです。今回の実習では美術・博物館が抱える問題など多くのことを学びましたが、あらためて「教育活動の重要性」を感じる事となりました。



## 学芸員の目線に立って

名古屋女子大学4年 宮田 瞳さん

今まで「観る」側だった自分が、「観せる」という目線に立って博物館を見ることができた、そんな一週間でした。例えば1つの仏像にも運搬の際の苦労や扱う際の細かい配慮、災害の対策などがあります。つくられた背景や歴史があります。そして、大切に守られていたお寺の思い、学芸員の思いや意図があります。それらを感じることで、新たな目線を持って鑑賞することができるようになりました。子供から大人、芸術に詳しい人とそうでない人、様々な人の目線を考え、今後一層博物館について勉強していきたいと思っています。

実習生全員が将来学芸員の職に就けるかはわかりませんが、今回の実習で学んだことを生かして、今後博物館と人々をつなぐ、博物館の良き理解者、パートナーとなって欲しいと思います。

# 「おかざきの考古学 ～身近な遺跡をたずねてみよう～」

## —関連催事の記録—

学芸員 伊藤 久美子

7月18日から9月6日まで開催されたテーマ展「おかざきの考古学 ～身近な遺跡をたずねてみよう～」では、長年の遺跡調査や出土品整理により蓄積された成果をもとに、身近にたずねてみる事ができる岡崎市内の遺跡を取り上げ、その出土品を中心に紹介しました。開催期間中には、考古学や遺跡の調査について知っていただくため、講演会、施設見学会や夏休み子ども体験教室などを開催しました。ここでは、これらの内容をご紹介します。

バス見学会 7月23日(木)

### 出土品整理の施設見学

遺跡から発掘された出土品の整理作業がすすめられている岡崎市埋蔵文化財整理事務所と安城市埋蔵文化財センターを見学しました。土器な



どの出土品が掘り出されてから皆さんに見えていただけるまでの過程について、どちらの施設でも担当者から、日常業務として行われている実作業を前に丁寧な説明を受けました。根気のいる細かな作業に参加者の皆さんは、思わずため息。日頃目にする事のない地道な資料整理に興味も津々。説明を熱心にメモしたり、作業に携わっている方に質問したり、写真に収めたりと参加者の関心の高さをうかがわせる見学会となりました。

講演会 7月25日(土)

### おかざきの考古学

講師：荒井信貴（当館副館長）

黎明期とも言えるおかざきの考古学、文化財保護に尽力し、今日ある遺跡調査、保護活動への道筋を作り上げてきた先人達を取り上げながら、郷土の考古学について話してもらいました。美術博物館業務となるまでは、長年、岡崎の埋蔵文化財行政を一手に担ってきた当人からどのような話がでるかと思いきや、学史的な観点からの切り口でした。展示内容に即した話題を期待してきた聴講者には、やや変化球でしたか。



夏休み子ども体験教室 8月5日(水)

### 出土品に触れてみよう

出土品の実際に触れるまたとない機会。縄文土器から埴輪、古代の瓦、中世陶器など、触れてその感触を確かめてもらいました。子どもたち以上に



お母さん方が熱心でした。

夏休み子ども体験教室 8月8日(土)

### まがたまづくりにチャレンジ

簡易キットを使っの古代のお守り“まがたま”づくり。慣れないカッターナイフ、やすりに手こずりながらも、削った粉で真っ白になりながらも、時間内に全員完成。世界でひとつの自分自身のまがたまを手にとニコリ。



講演会 8月22日(土)

### 西三河の最新発掘情報

講師：山口遙介（岡崎市教育委員会社会教育課）

伊藤基之（安城市教育委員会文化財課）

浅岡 優（西尾市教育委員会文化振興課）

杉浦裕幸（豊田市教育委員会文化財課）

岡崎市はじめ近隣の発掘担当者より、昨年度から今年度にかけての遺跡調査について、最新情報を映像を使いながらわかりやすく報告してもらいました。講師の方々は発掘調査の最前線を持っていく立場から、単に遺跡を掘るだけでなく出土品など調査成果の活用、発掘や文化財保護への理解と協力を熱く語っていたのが印象的でした。



# INFORMATION

## ■展覧会スケジュール

2009年9月18日(金)～11月8日(日)

### 菅原健彦展

第2回東山魁夷記念日経日本画大賞展で大賞を受賞し、新たな日本画の探求者として注目される菅原健彦。本展では、大都会の景観を大胆に切り取った初期作品から、淡墨桜や雲水峽などの大自然を描き出した近作まで、彼の画業の全貌をご紹介します。美術館では初の大規模な個展であり、本展にあわせて制作される新作も見逃せません。

2009年11月21日(土)～2010年1月17日(日)

### 三河の禅林 — 臨濟禅と武家の心

旧額田町にある天恩寺をはじめとした三河の臨濟宗寺院の資料をもとに、寺院の盛衰に深く関係した足利氏などの地域の有力者が信仰を寄せた禅の文化やその美術を紹介します。

2010年1月30日(土)～3月28日(日)

### ロシアの夢 1917-1937

1920年代から30年代のロシアでは、前衛芸術家たちが革命後の新しい社会創造に向けて、伝統的な絵画や彫刻の枠を越え、建築、演劇、デザイン等様々なジャンルで積極的な活動を展開しました。本展では、その熱気を写真資料を交えながら広く紹介します。

#### ●開館時間／午前10時～午後5時

〈入館は閉館時間の30分前まで〉

- 休館日／毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)、年末年始(12月28日～1月4日)  
※展示替えのため臨時休館することがあります。

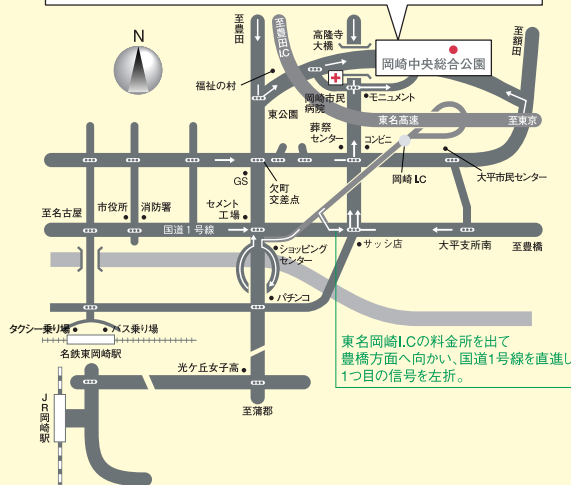
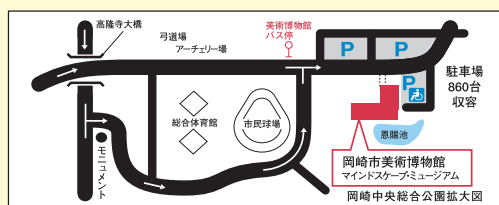
#### ◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、

(名鉄バス) 「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分

#### ◎タクシー／名鉄東岡崎駅から約15分

JR岡崎駅東口から約20分

#### ◎自家用車／東名高速道路・岡崎ICから約10分



# OKAZAKI CITY MUSEUM



【岡崎市美博ニュース／アルカディア】

●Arcadia 第42号 ●2009年10月発行 ●編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内  
TEL0564-28-5000(代表)

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>



古紙パルプ配合再生紙使用